市政だより
太宰府
NO. 393
S62 12.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉛
石造燈籠（県指定文化財）

高さ約二百三十七チセン　花崗岩製
江戸時代　太宰府天満宮蔵

廻廊内の池の横に、一対の石燈籠が建っています。そのうち本殿に向って右側にある燈籠が指定文化財です。

彫られた銘から、慶長十三年（一六〇八）に初代藩主黒田長政が寄進したことがわかります。

左側の燈籠もほぼ同じ大きさ、同じ形をしています。

ほかに、楼門前に十基の石燈籠が並んでいますが、これは寛永二年（一六二五）第二代藩主黒田忠之によって寄進されたものです。

■ 毎月2回　1・15日発行　■ 編集　太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514

市政だより
太宰府
NO. 395
S63 1.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉜

鬼すべ

（県指定無形民俗文化財）
太宰府天満宮

一月七日の夜、「鬼じゃ、鬼じゃ」のかけ声も勇しく、天満宮近くのまちのあちこちから男たちが繰り出す。鬼の角を模した縄鉢巻をしめ、梅紋の法被に縄襷のかっこうで、あるグループは大団扇、もう一つのグループはカリ股（股木）、そして三本の大松明を振りまわす一団、また鬼警固は手に手にテン棒（木槌）を持ち、鬼すべ堂に集まってくる。

午後九時、堂前に積まれた青松葉と藁の山に忌火が移されると、燻手は大団扇で必死にあおぎ、堂内の鬼警固は煙を外に出そうと板壁を打ち破る。祭りが最高潮に達したころ、鬼係に守られた鬼は堂内に入り、中を七回半、続いて堂外を三回半巡る。その時、一巡りごとに、煎豆を投げられ、護符をつけた卯杖で打たれるのである。

年の始めにあたって、災いをはらい、福を招くための行事である。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 太宰府市役所企画課 ☎921-2121 内線514

市政だより
太宰府
NO. 396
S63 2.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉝

銅製麒麟・鷽

（県指定文化財）

麒麟　総高二百六センチ
鷽　総高百六十一・五センチ
江戸時代　太宰府天満宮蔵

天満宮に参詣した人々が手を清める手水の右手奥に、この二つの像は立っています。

麒麟は、中国古代の想像上の動物で、聖人が現われて王道が行われる時に出現すると伝えられています。某ビール会社のラベルに描かれている動物といえば、わかっていただけますでしょうか。

鷽は、ご覧のように学の字の子の替わりに鳥を書いているところなどから、学問の神天神様ゆかりの鳥とされています。

鷽がとまっている円筒形の銅製台座に彫られた銘文から、次のようなことがわかります。江戸時代の嘉永五年（一八五二）二月、鳥羽屋七蔵他二百五十四人が施主となって奉納し、博多の鋳物師山鹿氏がこれらを造りました。以前は「金の鷽」になぞらえ、金メッキしてあったと思われます。

■ 毎月2回　1・15日発行　■ 編集　太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514

市政だより

太宰府

NO. 398
S63 3.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉞

銅製神牛（どうせいしんぎゅう）

（県指定文化財）

高さ　五十五・〇センチ
長さ　百三十五・〇センチ
江戸時代　太宰府天満宮蔵

天満宮の楼門の手前、右側にこの像は横たわっています。

いろいろないい伝えなどから牛と道真公とは関係が深く、天神社には牛の像が置かれていることがよくあります。この牛もそのような一つで、文化二年（一八〇五）丑年十一月に福岡と博多の有志によって奉納されたものです。

これを造ったのは山鹿儀平包賢（かねかた）で、前回掲載の麒麟と鬣を造った山鹿氏と同じ系統の博多の鋳物師（いもじ）と思われます。山鹿氏はもと遠賀郡芦屋の釜師で、本姓は大田といいますが、芦屋の山鹿に住んでいたので山鹿と称したようです。江戸時代になって博多や姪浜に移り住んだと伝えられます。

なめらかに仕上げられた肌は、思わず撫（な）でたくなるような暖か味があります。

■ 毎月2回　1・15日発行　■　編集　太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514

市政だより
太宰府
NO.400
S63 4.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉟

北谷の唐椿（とうつばき）

（県指定天然記念物）

樹高 五・七七メートル
樹齢 推定二百余年
枝張り 東西四・九メートル
南北五・三メートル

桜が咲くころ、北谷の田村邸の庭は濃いピンクの花で飾られます。庭中に枝を広げた樹齢二百年の唐椿が花をつけたのです。

名のとおり唐椿は中国原産の椿で、その特徴の一つとして大きな花があげられます。この木も直径十四センチ前後の八重咲きの見事な花を咲かせます。また原産地中国では十五メートルの大木にまで成長するそうです。しかし唐椿は寒さに弱いので、江戸時代に日本に入ってきたものの根付いたものは少く、この木は全国的にも珍しい唐椿の古木として貴重なものです。

珍しい花のうわさを聞いて見に来る人も多いようですが、なんといっても個人の庭先、鑑賞する時はどうか遠くからそっと、そんな心遣いがほしいものです。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 太宰府市役所企画課 ☎921-2121 内線514

市政だより
太宰府
NO. 402
S63 5.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㉛

木造吉祥天立像（重要文化財）

クスの寄木造　像高一百十八㌢
平安時代後期　観世音寺蔵

吉祥天は福徳を司る女神であり四天王の一人毘沙門天の妃ともいわれています。

その姿は宝珠を手にして華やかな装身具を身にまとった像が多くそれは唐の時代の貴婦人の姿になぞらえたといわれています。

観世音寺のこの像も、ふっくらと肉付きよく、おおらかでゆったりとした姿で立っています。堂内の巨像にまじって小さく見えますが、二メートルを越す吉祥天は全国でもこれだけです。

■ 毎月2回　1・15日発行　■ 編集　福岡県太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514

市政だより
太宰府
NO. 404
S63 6.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㊲

太宰府安養院跡五輪塔残欠

（県指定文化財）

鎌倉時代中期

この石塔は観世音寺公民館の後方の雑木林の中に座っています。武藤少弐氏の初代資頼（すけより）の墓と伝えられているものです。

石塔の形はいわゆる五輪塔という形ですが、五つの部分のうち、上部二つが欠けて、下三輪だけが残っています。

写真の中心部分は水輪（すいりん）と呼ばれるもので、普通は球形に作られますが、この五輪塔は四角な石の角（かど）をカットしただけという非常に珍しい形をしています。また各輪の四方の面には円が描かれ、その中に仏様が座っています。

浮彫された仏像や隅切の五輪塔の形など、この塔はなかなか興味深いものとして注目されています。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市役所企画課 ☎921-2121 内線514

市政だより
太宰府
NO. 406
S63 7.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㊳

横岳崇福寺跡（県指定史跡）

市役所の斜め前に建つ筑紫農協の横を山の方へ入って行くと、道の突きあたり、四王寺山麓一帯に広がるのが横岳崇福寺跡です。現在は観世団地の東側一部や、瑞雲寺・崇福寺別院などが建っている所です。

崇福寺というと博多千代町の寺を想い出される人も多いでしょうが、それは太宰府に建っていた崇福寺が岩屋城の戦いで焼けた後、黒田長政によって博多に移し再興されたものなのです。

さて太宰府の崇福寺は、仁治元年（一二四〇）、随乗房湛慧という僧が建立した禅寺です。博多山笠の起源に関係するという聖一国師や、多くの高僧を育て、臨済禅に大きな足跡を残した大応国師などの名僧が住し、武士階級を中心に強い影響力を持ったようです。

寺城の東端には大応国師の墓（瑞雲塔）があります。無縫塔（卵塔）という形で、鎌倉時代の石塔として有名なものです。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市役所企画課 ☎921-2121 内線514

市政だより
太宰府
NO. 408
S63 8.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ㊴

鉄製雲板（県指定文化財）

長径二十七・二チセン　短径二十六・〇チセン　太宰府天満宮蔵

雲を型どった形から雲板（うんばん）の名で呼ばれています。ほかに朝板、打板（だばん）という名称もあります。

もとは中国の楽器でしたが、日本には鎌倉時代ごろ入ってきて、主に禅宗寺院を中心に使われた仏具の一つです。その用例は食事や法要・坐禅などの時刻を知らせる合図に打ち鳴らされるのです。

天満宮のこの雲板は円形に近い形をして、蓮華文（れんげもん）の撞座（つきざ）が両面に作られています。また残念なことに鉄製の鋳肌（いはだ）が荒れているのは、火事にあったためと思われます。

両面にのこる銘文は

（表）奉寄進安楽寺　文治三年八月日　（裏）和泉

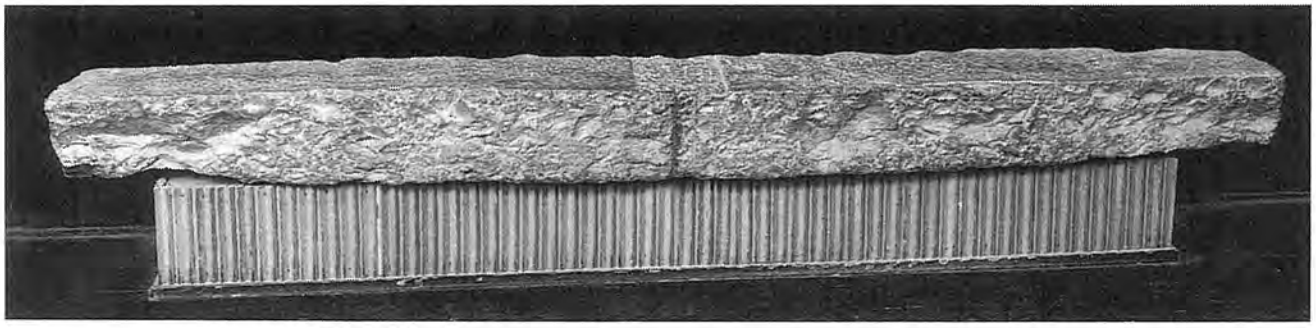
わが国現存では最も古い文治三年（一一八七）の作と考えられますが、製作年代については形や銘文の書体などから、もう少し検討を要するということです。

■ 毎月2回　1・15日発行　■　編集　福岡県太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514

市政だより
太宰府
NO. 410
S63 9.1
題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

蒙古襲来　矢田一嘯筆　県指定文化財　本仏寺所蔵

太宰府の文化財
蒙古碇石（県指定文化財）



花崗岩製　全長二二二・〇センチ
最大幅三〇・〇センチ
太宰府天満宮蔵

今から七百年前の鎌倉時代、日本は二度にわたって蒙古軍に攻められました。いわゆる蒙古襲来・元寇といわれるものですが、この時蒙古の軍船が碇として使用していたのがこの石だと伝えられています。

天満宮所蔵のこの石の外、現在までに約四十個の碇石が見つかっていますが、その出土地は博多湾をはじめ、長崎県の五島から山口県までの海底と以前海底であったところから発見されます。また中国の福建省泉州でも見つかっており、これは宋の商船の碇石だと考えられています。

従って蒙古碇石と伝えられるものが全て元寇の時の元軍船の碇石だったとは断定できませんが、そのころの大型船はこのような碇石を使用していたようです。

■ 毎月2回　1・15日発行　■ 編集　福岡県太宰府市役所企画課　☎921-2121　内線514